



### KS-16608

通信用に開発されたパワーアンプで、着脱式のアンプケースが付いて、ライトと電源スイッチのブロックがパネル側がシャーン横に付け替えられるようになっている。6L6真空管2本のプッシュプル動作で12W動作と音質重視の設計になっている。型番からすると、KS-16617より少し前に開発されたアンプと思われる。KSシリーズのアンプの中では比較的多く生産されており、当時のアメリカでは最も多く生産され入手がしやすかった6L6真空管を選んだのもうなずける。音質は6L6の透明感ある音質を中域の豊かなWesternトーンでまとめあげた音質で、小出力ながら力強いパフォーマンスを演じてくれる。市場価格45～55万円/ペア

カバーを取り付けた状態

フロント部

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

### KS-16617

正面がスイッチパネルのラックマウント型の電話のモニター用に開発されたパワーアンプ。出力管に6V6が2本プッシュプル動作で8W出力となっていて、業務用らしく600Ωラインのインプットトランスを標準装備している。また、内部の配線によって4、8、16、32、250、600で接続可能となっている。音質はウエスタンらしい中域のしっかりした音の中に6V6真空管の持つ少しスパイシーな味が良く絡んだ明瞭感のある美しい音が聴ける。高能率スピーカーなら38cm同軸ユニットにも十分対応できる。市場価格30～35万円/ペア

## 第14回 Western Electric KS-Type Amplifier

Western Electric 社といえばアメリカの電機機器開発・製造企業として1881年から1995年まで、AT&Tの製造部門として存在した国家的企業で、日本のオーディオマニアの間では真空管300B、555レシーバーなどの製品で親しまれている。同社は1950年代から60年代にかけての業務拡張において、生産ラインのOEMが進み、アメリカ国内のそれぞれの地域で信頼性のあるDukane、Mcintosh、Elgin、Rayparなど数社によって、生産ラインをWestern Electric社に管理された（アンプの回路設計とトランスはWestern Electric社から供給）KSナンバーのアンプが数機種生産されている。



本文/田中伊佐資

製品解説/岡田圭司（アトリエJe-tee代表）  
撮影/君嶋寛慶

# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



カバーを取り付けた状態

フロント部

### KS-16610

KSシリーズ最大出力のアンプで、劇場や大ホールで使われたと思われる。通常6550真空管を4本バラレルプッシュプル動作で使うと150W以上の出力が引き出す事が可能だが、KSシリーズの中でこのアンプだけチョークトランスと電圧安定管のOD-3が搭載され、音質重視の75W動作となっている。このアンプも着脱式のアンプケースが付いて、ライトと電源スイッチのブロックの場所が付け替えられるようになっている。型番からしてKS-16608とはほぼ同じ時期に開発されたものだが、生産台数はかなり少なく、滅多に市場に出てこない。音質はKS-16608の表現力豊かな音質を損なわずにパワーアップさせた、現代のスピーカーにも十分対応できる強い低域音に駆動力のあるサウンドを聴かせてくれる。市場価格155～170万円/ペア



# Western Electric

ウエスタンは、新しめに魅力あり  
オートグラフが生きて鳴る

「いつ登場するのか。いやしないのか」と気にはなっていた大御所ウエスタン・エレクトリックにようやく出番が回ってきた。このタイミングはまったく「Te eの岡田さんらしい。「なにを差し置いてもまずはウエスタンでしょう」となるのがウインテージ・ショップ店主のありがちな姿だと思ふのだが、この性格的存在をいまこころひよこりと持ち出したのである。しかも後光が差すような伝説の戦前モデルではなく、1960年前後のウエスタンにしては新しいめのパワーアンプである。

「生粋のウエスタン・ファンは『こんな若いのは使わない』とよく言います。だけれどすごくハイファイで豊潤な音がする。この頃のどんなスピーカーともマッチングはいい。逆にいえば古いウエスタンのアンプが特殊なんですね」

この連載で大きなテーマとなっている「ウインテージの穴場探し」の面目躍如といったところだ。というか、僕のようなウエスタンの右も左も分からない人間にしてみれば、リッチなアメリカン・サウンドの黄金期という別の意味で、この年代の製品には惹かれる。

アンプは出力が異なる3機種が用意されていた。すべてモノブロック仕様だ。型番の数字は非常に近いので完全に兄弟である。スピーカーはタンノイのオートグラフ。稀少なモニター・シルヴァーを装着している。

「初期のタンノイは意外と小出力のウエスタン系のアンプで生き生き鳴らすことができずね。それ以降のタンノイは低音がモコモコしちゃう場合があるけれど、これはいける。クラシックだけでなく意外とジャズも歯切れがいい。ではそろそろ聴いてみますか。定番からいきます」

「ヘレン・メリル・ウィズ・クリフォード・ブラウン」を出力の小さい順で聴いていった。ヘレンの声は、アンプ「小」がベタつかず清楚な色気があり、「中」が少し厚くなって落ち着きが出て、「大」で陰影感が増強された。もちろんこれは連続して聴いた結果であって相似形ともいえるぐらいの同系トーンで3機種がまとめられている。岡田さんは「設計とトランスがいいんだろうね」と指摘した。確かにハツラツとしていて曇りのない音だ。

試聴はどんどん続く。ジェニファー・ウォーレンの声は爽やかな「小」が僕の好みで、ロッシーニの弦楽ソナタはさすがに深みがある「大」が圧勝。結局のところ「大」の三分の一ぐらいの価格で手に入る「中」が音とフトコロの満足度が高いように思った。

ところでこれらのパワーアンプが店にペアで揃う頻度といえば、「小」が年に1回、「中」が年に2回、「大」が5年に1回だという。どうやら数年に一度接近するなんとか慧星となんとか流星群をいっぺんに見たような好機だったようだ。



# Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが話題に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号ではついにWestern Electricが登場。1930年代に開発されたモノラルパワーアンプ「WE 118A」を紹介することにしてしよう。



## WE 118A power amp

1938年頃に映画音響用に開発され、RCA社が世界で初めて1936年頃に軍事用に開発したビーム4極管の6L6を4本使用して出力50Wを実現したモノラルパワーアンプ。この頃から映画館は入館者数の増大を受けてスピーカーシステムも大掛かりとなり、この頃はまだ15Wクラスのアンプしかない時代に開発された画期的なアンプだった。その後1940年になると同社がRCA-6L6Gをベースに真空管350Bを開発し、有名な124シリーズのパワーアンプの生産が始まる。118Aパワーアンプはシアター用に開発されているため、中域音の表現が豊かで力強く歯切れの良い低音が特徴的。その後の1947年には後継機として350B/6L6を4本搭載した75W出力の143パワーアンプが開発された。

## 第32回 Western Electric

アメリカで1881年頃から通信と映画産業の音響機器を最先端で開発していたAT&Tの製造部門として存在した会社で、RCA社と共にアメリカの音楽、映画産業を支えていた企業である。当時まだ始まったばかりの通信と音響機器の開発には膨大な予算と人材が投入され、今でもそのクオリティの高い製品が年代を経ても世界中のマニアに支持されている。特に1930年代から1950年代に開発されたスピーカー、アンプ、真空管類は現在生産されているハイエンドのオーディオ機器にも強い影響を与えている。



ラインパネル。手前左側が入力用端子パネル、右側が電源、アウトプット用端子パネルとなっている

搭載トランス。角型のトランスカバーで内部にビッチで振動止めされたパーマロイコアのトランスが搭載されている。手前中央がアウトプットトランス、右奥がチョークトランス、左奥が電源トランスである

## Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

## Western Electric



電源部/出力部。電源用の整流管は5Z3が1本、出力管には6L6(今回の個体は6L6GB)が4本搭載



入力部。インプットトランスには618-Cが搭載され、6J7 2本で増幅される

## 原寸大の音を思わせる 恐るべき生命感を再現

地下1階と2階をぶち抜いたMさんの広々としたオーディオルームに、すっかり長居させてもらっている。この現実離れした空間で、前回はエレクトロボイスのパトリシアIVを聴いた。そのときのアンプはマッキントッシュ。プリがC22、パワーがM1-75だった。だがオーナーはこのコンビ一筋ではなく、別のアンプでもパトリシアを楽しんでいる。それがウエスタンのWE 118Aだった。

このアンプの持ち味を知るために、マッキントッシュと聴き比べてみることにした。

前回と同じく、マイルス・デイヴィスが1958年に黄金メンバーと行ったセッションから「オン・グリーン・ドルフィン・ストリート」を両アンプで連続して聴いてみる。

見た感じという点、時代を考慮しても当たり前だろうが、WE 118Aの方が古色蒼然としている。質素な業務用アンプ然としている。

だが音はこの風貌とは打って変わってモダンだった。マッキントッシュよりも明瞭でスタジオモニターの。質感のリアリティは上かもしれない。とにかくまったくノスタルジックではない。

べき生命感があふれている。

ブランド力を超えてなにかと崇拝すらされているウエスタン製品を、それほどなのかなあ?と個人的に疑問がないわけではない。だがこうしてWE 118Aの神秘的ともいえる力を体験するとやっぱりとんでもないメーカーだったんだなと納得せざるを得ない。ストレートに言うところ「1930年代に作られたアンプだから? ひえーマジかよ」なのである。

当然モノラル時代のアンプだから、左右は別個に誕生し、まったく別の環境で使われていた期間を経ている。双子のように左右の音色が揃っていることもその「マジかよ」に含まれている。調整はかなりたいへんだったのではないかな。

次はムターが弾く「チャイコフスキー」ヴァイオリン協奏曲。カラヤン指揮ワイーン・フィル。

マッキントッシュはおいしいトーンでもてなしてくれ。WE 118Aはヴァイオリンの細かい表情がよく見え、極めて真摯な姿勢でソースを忠実に再現しようとする。このあたりはいかにもプロユースである。

ほかにもヴォーカルものなど何曲か聴いたがマッキントッシュは、わりとすぐにアンプの個性が把握できるのに対し、ウエスタンはソースによって美点が変わるような感じがした。何枚も聴く必要があった。その懐の深さもウエスタン神話を生んでいるのかもしれない。